



祐介の目

No.156

大田祐介 (福山市議会議員)

無名の人

議会の視察で山口（萩まちじゅう博物館）→佐賀（宇宙科学館）→鹿児島（始良市子育て基本条例）と回ってきた税金を使つての視察であるから、視察外の時間も有意義に過ごしたい。早起きして湯田温泉の町並みを散策すると、井上公園という公園があり、幕末の志士・長州ファイブの井上馨の生家があつた場所だつた。井上の銅像があり、その横に「所郁太郎」という医者の顕彰碑があつた。それを読むと何か聞いたことのある話・

記憶をたどると、43年前に読んで中学校教科書の司馬遼太郎のエッセイ「無名の人」であつた。井上は暴漢に切られて瀕死の重傷を負い、兄に介錯を頼むが母が必死に止めたそうだ。そこに現れた所が井上の傷を畳針で縫う内容で、通常の縫合針は縫いやすいよううし字型だが、まっすぐな畳針で麻酔無し焼酎で消毒しな

がら井上の体を50針も縫つた。井上は顔も縫う際に激しい痛みを訴え、所は「生きる力があればこそ痛むのだ。」と励ました。井上は奇跡的に一命をとりとめ、後に外務大臣として活躍するの

に對して所は手術の翌年27歳で病没し無名の人に終わった。司馬は明治維新とは所のような多くの無名の人により実現したとし、所の足跡をたどつて教科書に寄稿した。じつは井上の介錯を母が止めた逸話は戦前の教科書に掲載されており、多くの人が知っていた。司馬は忘れられた所の功績を再発掘したと言える。井上も所に対する恩を忘れず、所の甥を東京に呼び寄せて医学校に通わせ、医者になると所の後を継がせた。

所は高杉晋作とも親交が深く、所が死んだ時に馬を飛ばしてやってきた高杉は人目もはばからず畳をかきむしつて号泣したという。所は「医は人の病を医し、大医は国の病を治す」という言葉を残している。大医は政治家を指すと言つて間違ひなく、所がもう少し長生きしていれば名医から名政治家になつていただろう。明治維新と同じく激動の現代において所のような多くの無名人の再来が望まれる。